

bunka@nagasaki-np.co.jp

「西洋」全般指す常套句

長崎居留地

ドキュメント

フライン・パークガニ

15

「オランダ」の奥義

オランダ東インド会社のふようになった。長崎特有の平戸商館が長崎に移転した寛永18(1641)年から、安政五方国条約によって日本が開国する安政6(1859)年まで、オランダ人は日本への来航と居住を許された唯一の欧米人であり、長崎港に浮かぶ出島のオランダ商館は、日本とヨーロッパを結ぶ唯一の接点であった。

この2世紀以上にわたる同居と協力の間に、長崎の人々は、ドイツ人やスウェーデン人を含むすべての白人を「オランダさん」と呼



太平洋戦争後に発行された絵葉書。キャプションには、オランダ坂が特約に描かれ、周辺の洋風建築が「オランダ屋敷」と紹介されている。(筆者撮影)

ORANDA-SAKA, NAGASAKI

坂の長崎いしだ。み
前のオランダ坂
オランダ屋敷に雨が降る
長崎らしい風景である。

誤った印象与える要因にも

のうち、オランダ国籍の者はわずか2人であった。それでも、横浜や神戸では「異人」という言葉が優勢だったのに対し、長崎住民は依然として「オランダさん」を使い続け、オランダ料理、オランダ屋敷、オランダ墓地などのように、「オランダ」は西洋のものを全般的に指す際に使用する常套句であった。明治期に長崎を訪れたイギリス人旅行者の手記で、街を散策していると子どもたちが「異人」や「外人」ではなく、「オランダ」と呼ばれたという愉快なエピソードが紹介されている。徳川幕府および明治政府は外国人居留地のインフラ整備を担い、大浦地区の埋め立てや下り松川の護岸工事のほか、石段や石畳道の建設を行った。東山手や南山手に造られた石畳の坂道は、案の定、オランダ人がほとんどいないのに、「オランダ坂」と呼ばれるようになった。

太平洋戦争後、長崎は外国との長い交流の歴史を反映した名所旧跡の数々で注目を集め、観光は長崎の最も重要な近代産業の一つとなった。中でも東山手のオランダ坂は、長崎独特の異国情緒のシンボルとして多くのパンフレットや絵葉書



オランダ坂のふもとに建った石壁が誤解を招く。(筆者撮影)

インターネットで公開されているグーグルマップには、オランダ風の洋館という誤った表記がみられる。

「オランダ坂」の碑

オランダ坂
オランダ風の洋館
が建ち並び、異国...

に紹介された。これらの画像の多くには、雨に輝く石畳や、通り過ぎる傘を差した女性が描かれ、かつての国際恋愛を叙しげなタッチで暗示している。同様に、この時代の演歌には、雨に濡れた長崎の石畳を感傷的に歌った歌詞が多い。

予想外の観光客の注目を受け、長崎市は、坂の下に「オランダ坂」の碑文と英訳を添えた石碑を設置したが直訳である英語の「DUTCH SLOPE」はオランダ人が東山手に住んでいたとか、石畳や近隣の建物がオランダと直接関係があるかのような誤った印象を与える。現在、どれだけの観光客や地域住民が「オランダ」の深い意味に気づき、土足長き長崎の心に触れているのだろうか。

(グラバー園名誉園長)

月1回掲載します